

石井構成員資料

石井 彰（いしい あきら） 放送作家 54歳

1955年長野県諏訪市生まれ。都立富士高校卒業。

音楽プロダクション、テレビ番組制作会社を経て放送作家となる。

現在、TBSラジオ『永六輔の誰かとどこかで』の演出やラジオ・テレビのドキュメンタリー番組を企画・構成。中京テレビ開局40周年記念番組（8回シリーズ）キャスター。

2005年から武蔵大学社会学部メディア社会学科非常勤講師。

このほかにラジオでは、NHKFM『日曜喫茶室』『トーキングウィズ松尾堂』

ニッポン放送『ようこそ長嶋茂雄です』、文化放送『志の輔ラジオ気分がいい』

NHKFM『きたやまおさむ 帰ってきたディスクジョッキー』03～08シリーズ、

衛星デジタルラジオ『新潟県中越地震、被災地からの伝言』他の番組を構成してきた。

最近の主な番組としては、

2006年『趙博・DJライブ～ぼくは在日関西人』TBSラジオ 構成。

2006年『命が終わるとき あなたは』北日本放送 構成。

2007年『脳死移植10年の証言』文化放送 構成。

2008年『魂の46センチ砲 戦艦大和に想いを載せた男たち』文化放送 構成

また07年から衛星デジタルラジオ『ミュージックバード』防災ナビゲーターとして出演
テレビでは、02～04年『ふるさと未来』（長野放送）構成

05年『NNNドキュメント05' 検体番号6号』（青森放送・日本テレビ系）構成

05年『戦のかけら』（東海テレビ）を監修。

08年～ 民放を含む放送コンクール受賞作を一挙再放送するNHKBS2『ザ・ベストテレビ』企画・構成。09年は出演。

08年『永六輔・吉岡忍ドキュメンタリーの旅 時代の肖像』（東海テレビ）構成

また東京新聞、月刊GALAC、放送レポート、放送文化、民間放送新聞で放送批評連載
（受賞歴）

1988年 東海ラジオ『出走』民間放送連盟賞ラジオ報道優秀賞

〃 東海テレビ『ええじゃないか名古屋』テレビエンタテインメント優秀賞

1992年 文化放送『小室等 東京 音の旅』ギャラクシー賞ラジオ部門奨励賞

2001年 FM雪国『平和へのモーニングコール』ギャラクシー賞ラジオ部門選奨

2004年 文化放送『きょうだいの死が私をかえた～犯罪被害者の現実』

民間放送連盟賞ラジオ報道優秀賞

2005年 文化放送『小児臓器移植の壁』民間放送連盟賞ラジオ報道優秀賞

青森放送『NNNドキュメント05 検体番号6号』

ギャラクシー賞テレビ部門月間賞、奨励賞

2006年 ニッポン放送『僕たちの高田渡』ギャラクシー賞ラジオ部門優秀賞

北日本放送『命が終わるとき……』民間放送連盟賞ラジオ報道優秀賞

2007年 文化放送『脳死移植10年の証言』民間放送連盟賞ラジオ報道優秀賞

2008年 文化放送『魂の46サンチ砲』民間放送連盟賞ラジオ教養最優秀賞
(審査委員歴)

芸術祭ラジオ部門選考審査員(文化庁)07年～ 同選考審査委員長09年

芸術選奨放送部門選考審査員・推薦委員(文化庁)04年～05年、07年～

民間放送連盟賞テレビ教養中央審査員07年 テレビ報道中央審査員08年～

民間放送連盟賞テレビ地区審査員(関東甲信越、中部・北陸、九州・沖縄)

民間放送連盟賞ラジオ地区審査員(北海道・東北、関東甲信越、中国・四国、九州・沖縄)

ギャラクシー賞(放送批評懇談会主宰)テレビ部門選奨委員06年～

地方の時代映像祭・審査員07年～

放送人グランプリ(放送人の会主宰)選考委員06年～

特集 音とことばで育む～ラジオの未来

ラジオの未来を開く試み

—それは地方局から始まっている

放送作家 石井 彰

「利用者が少ないラジオ界で利用者獲得のための大きな動きがあっただろうか？ ラジオ局側は驕っているのではないか。ラジオの危機はすぐそこに迫っている。今がよければいい、という考えは捨て、ラジオを本当に無くしたくない、自分たちの好きなラジオが存続してほしいと考えているならば、動き出さなくてはいけない」

いきなり頭をバチーンと殴られるような文章に出会った。これを書いたのは放送評論家やラジオ制作者ではない。

日本大学芸術学部放送学科4年の刈屋瑛子さんが、2008年度橋本孝良教授のゼミナール研究レポート「若者よ！ 今だからRadio」*1に書いた文章だ。橋本ゼミでは1996年から毎年優れたラジオ研究を続けてきた。08年度は中学生2000人を対象にアンケートを実施して、若者向けラジオ活性化のための調査研究を行っている。

同レポートの中で「小さいころからラジオが大好きだった」という刈屋さんは、ラジオ局の怠慢を批判しながら、ラジオの未来を考えるならば、中学生のリスナー獲得が絶対であると指摘する。そしてラジオ離れの顕著な中高生を獲得するには「パーソナリティが自分で語る言葉を持ち、番組のメッセージ性がある音楽を流すこと、そして音楽を通し

て語り、信頼を獲得するということが、今若者向けラジオには必要である」と、きわめて具体的かつ真つ当な提案まで行っている。

私も含めラジオに携わる人たちは、もはやラジオの危機にすっかり慣れてしまい、昨日と同じことをただ繰り返しているのではないだろうか。もちろんあきらめるのはまだはやい。ラジオをなくしたくないと考えて、ラジオの未来を開くために動き始めているラジオ制作者も、全国には少なからずいるからだ。

*1レポート希望の方はFAX:03-59995182 79(放送学科事務室)までお申し込みください。

やはりラジオは報道だ

毎日放送(大阪)は10月から報道部が制作する新番組「Radio News たねまきジャーナル」(月～金、21時～22時)を始めた。メインキャスターは多くの聴取者から信頼を集める水野晶子アナウンサー(木曜のみ千葉猛アナ)。花になれば大きく取り上げられるであろうニュースを、「たね」の時から注目し取材して届けよう、という意欲的な報道番組だ。番組を始めて1カ月目のたしかかな手応えを、水野アナはこう語る。

「番組を始めて気がついたのは、ニュースの主役は聴取者だ、ということでした。なに

を今さらと思われるかもしれませんが、ニュースは永田町ではなく、聴取者の暮らす町で起きているんですね。また聴取者は、ただ番組を受信や応答する人ではなく、じつは発信する人なんだ、とひしひし感じています」

番組では聴取者から寄せられたニュースが地道に取材をしてレポートを続けている。「町から魚屋さんが消えている」との聴取者のFAXをもとに漁業関係者やスーパーなどを取材して、かつては500軒に1軒はあった魚屋が消えた背景にある、新鮮で安い魚が消費者に届きにくい水産業の流通問題を浮き彫りにした。また「僕たちの福祉作業所を見てほしい」という知的障害のある聴取者からのメールに心えて、アナウンサーが作業所を密着取材する中から、障害者自立支援法がいかに障害者の自立を妨げているか、その実態をレポートした。そして聴取者から寄せられた多くの意見をもとに、障害者を本当の意味で支える新しい法整備はどうあるべきか、を番組で熱く語り合ったりもしている。

初の本格的な政権交代によって、聴取者の政治への関心は大きく高まっている。そのことを「たねまきジャーナル」を取材して実感する。と同時に新聞や雑誌、インターネットに頼る2次情報ではなく、記者やアナウン

サーが自分たちの足で稼いだ情報こそ多くの聴取者の心に届くことを確認しておきたい。

もうひとつ大事なことは、番組と聴取者の関係を、本当の意味で双方向化していることだ。聴取者からの発信を促すだけでなく、それにきちんと応えることで、聴取者を番組の共同制作者として大事にしようとしている。少人数によるラジオ番組づくりは、聴取者の力を借りなければもはや成立しない。

「たねまきジャーナル」はナイターが始まる来春以降も、試合終了時間から時間を短縮せずに放送する予定だという。

世界のニュースより近所のニュースを!

沖縄、鹿児島、そして富山と、ニュース報道がある部分で担ってきた地元新聞が、次々夕刊廃止に踏み切っている。ますます少なくなる地元ニュースを伝えるために、ラジオ番組の重要性が高まっている。

富山県の北日本新聞社(朝刊約25万部、夕刊約3万2000部発行)は、今年12月28日付をもって夕刊を廃止し、朝刊単独紙となることを10月末に明らかにした。

地域経済の疲弊による広告出稿の減少、生活スタイルの変化からくる夕刊購読の衰退は富山だけでなく全国各地で起きている。今、

夕刊廃止を検討している県紙は多い。

かつて、「ラジオのドン」を名乗った元ニッポン放送の名プロデューサーの故・上野修さんは「テレビは朝刊、ラジオは夕刊」という至言を残している。「ラジオは夕刊のように芸能や文化、そして生活感を大事にしてほしい」と語られていたことを、まざまざと思い出す。夕刊には、全国や世界のニュース中心の朝刊とは違って、読者の暮らす「地域への温かいまなざし」があったはずだ。

その富山県の北日本放送(KNB)で、今年3月から急遽始まった『近所ラジオKNB』(月～金、12時30分～16時)に注目している。

番組タイトルが示すとおり、世界や日本のニュースではなく、「あなたのご近所」の話題をどんどん紹介して、あなたのご近所とご家庭をもっと明るくする楽しいラジオ」を目指しているからだ。番組プロデューサーも兼ねる松本芽久美ディレクターは、番組のコンセプトを次のように語る。

「番組企画を考えていた時期は、リーマンショックによる不況や派遣切りなど、世界も日本も、もう暗いニュースばかりでした。だからまずグローバルな話はどういうや、と思っただけです。もちろん今日食べている食品も、じつは世界経済と関係があることは知っ

ています。でもそれより、今朝、庭に花が咲いた。ご近所から煮物のおすそ分けがあった、というような、身近な面白い話題を取り上げていきたいと感じていました。当社の横山哲夫社長が、これからのローカル局に必要なのは井戸端ジャーナリズムだ、と言っていたことも番組の後押しになりました」

KNBでは今年3月まで6%の高い聴取率を誇る人気番組『相本商店いらっしやいませ』が13年間も続いてきた。だが民主党から衆院選への立候補要請が、パーソナリティーの相本芳彦氏にあったことがマスコミ報道され、番組は突然打ち切りとなった。

そのため周到な準備期間がないまま、新番組を開始せざるをえなかった。だが何が幸いするかわからない。KNBのテレビ、ラジオで活躍していたフリーの鍋田恭子さん(48歳)をパーソナリティーに起用して新番組はスタートする。番組開始から8カ月、松本デイレクターは自信を持って次のように語る。

「パーソナリティーが女性に代わったことで女性の聴取者が増えることは予想していません。でもそれ以上に、定年退職した多くのオジサンたちがこの番組を聴き始めてくれたことに驚かされました。会社生活一辺倒だったオジサンたちは、退職して地域のご縁の輪の中に戻ろうとしている。でも、な

にをしたらいいのかわからない。そこに地域の話題をふんだんに伝えるこの番組があった。夫婦で一緒にこの番組を聴いて、ほっとしながら会話をしているオジサンたちがたくさんいる。だから番組中の出演者コメントも、あくまで生活者の目線で伝えていこうと、しっかり事前の打ち合わせをしています」

ラジオのメディア特性である地域性については、これまでたびたび指摘されてきた。だが地域という曖昧な言葉ではなく、ご近所という具体性のある言葉に置き換えたところに、成功の鍵があったのだろう。世界の重大ニュースより、ご近所のほのぼのとした話題を伝える「ご近所ラジオ」の展開を、今後継続して追いかけていきたい。

ワンセグとの連携に可能性あり!

10月27日の第57回民放大会と同時に開催された技術展示に、新たにラジオの価値を再発見する好取り組みがあった。

それはラジオとワンセグ放送の連携だ。いずれもラ・テ兼営局の南海放送(RNB)と中部日本放送(CBC)が、今年「ラジオが作るワンセグ放送」を試みていたことに興味をひかれた。同時に別の地域で同じような試みが起きるシンクロシティは、大きく

広がる可能性を持つからだ。

愛媛のRNBでは今年4月、博報堂DYメディアパートナーズと共同して、ラジオ番組とワンセグ放送を連動させた番組『ライブdeしまなみラプストリー』(13時~14時)を制作して生放送した。これまでのワンセグ放送はテレビ番組のサイマル放送という形態が多かったが、RNBでは本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」10周年を記念して、しまなみを舞台にしたオリジナルの生ラジオドラマの放送を中心に、観光案内や現地からのSNG中継をまじえて構成されていた。田中和彦編成局長(当時)は企画の狙いをこう語る。

「ラ・テ兼営局でラジオはお荷物というか盲腸扱い(笑)されてきました。その一方でワンセグ放送も、技術的に画期的なことはみんなわかっていても、あんまりお金もかけられないので、いったいなにを放送したらいいのかわからない、こちらも盲腸状態でした。ところが、盲腸同士の組み合わせによって思わぬ効果が生まれた。営業的にも博報堂DYメディアパートナーズの協力によって、ナショナルスポンサーが数社ついてくれて大成功しました」

RNBではラジオ・テレビ、編成、技術、営業が一体となって取り組むことで企画を成功させ、7月には第2弾となるワンセグラジ

オ放送「日米大学野球選手権・第1戦」も放送している。画面が小さくストライク・ボール・アウトのスピーが見えにくいワンセグだが、ラジオ音声でたえず実況を伝えたため「臨場感があり、わかりやすかった」と視聴者からも好評だったという。またラジオとワンセグの組み合わせにより音声と映像の相互作用が生まれた結果、ラジオ媒体そのものの注目度が高まったことも特記しておきたい。

一方、名古屋のCBCでは、伊勢湾台風から50年目を迎えた9月26日に、災害報道をテーマに、特別番組『迫り来る!天変地異!伊勢湾台風50年・今そこにある危機!』を放送した。番組は15時30分~17時25分まで地デジ・アナログでテレビ放送され、後半部分となる16時20分ごろからワンセグはラジオが作る独立放送となった。CBCにとって、ワンセグ独立放送は初の取り組みであり、ラジオ局と報道局が中心となって制作された。

番組の内容は、ラジオスタジオから大災害発生2日目の以降の災害報道モデルケースを想定して、被災地・自治体・視聴者と電話をつないだりしながら、災害現場からの中継やニュースなども取り入れ、気象予報士やアナウンサーがスタジオトークを繰り広げた。

北辻利寿メディア戦略部長はこう語る。「阪神・淡路大震災の時に、暮らしに直結

した地域密着情報を、聴取者から寄せられた情報もまじえ伝えたのはラジオでした。このラジオの機動力をテレビにも活かして、ラ・テ兼営局ならではのやり方「ラジオXワンセグ」で、新しい災害報道のモデルを作ろうと考案しました。電話リポート、メール、FAXなど、外からの情報を次々伝える「ラジオの手法」は、ワンセグ災害放送でも活かす。またスタジオのホワイトボードに、メール・FAXの募集告知を書き、固定カメラで映すのも有効なことがわかりました。最大の収穫は、音声メディアとしてのラジオの可能性を追求できたこと、そしてラジオの出口としてワンセグがあることを実感できたことです」

ラジオとワンセグという組み合わせにより新たな災害放送のモデルが生まれようとしている。現在、携帯電話のワンセグ搭載率は86%超というデータもある。またNHK世論調査部の「全国接触者率調査」(放送研究と調査)09年10月号)によれば、携帯電話などワンセグが見られる機器の所有率は36.7%と伸びている。

95年阪神・淡路大震災、04年新潟県中越地震ではラジオの大きな役割が認識された。だが07年新潟県中越沖地震からは、ワンセグやカーテレビで災害放送を受信する人が増えている。災害時におけるラジオの優位性は崩れ

ようとしている。しかしワンセグ放送という新たなパートナーを見つけることで、ラジオの災害放送に新たな可能性が生まれてきた。と同時に災害放送に限らず、音声放送としてのラジオの力が再発見されつつもある。

今ラジオは大幅な売り上げ減によって制作者が減らされ、その結果としてつまらない番組が増え、聴取率も下がりが続いている。昨日と同じことを繰り返していたのでは、危機的な状況を突破することはできない。社会状況の変化(政治への関心の高まりやワンセグの浸透など)を的確に捉え、ラジオならではの方法を論(ご近所メディア、ワンセグとの連携)を編み出して、これからのラジオを作り出していかなければならない。新ラジオ時代を作るために動きだすこと、それが今すべてのラジオ関係者に切実に求められている。

(いしい・あきら) 1955年生まれ。TBSラジオ『永六輔の誰かどこかで』出演。2008年、文化放送『魂の46サンチ砲』戦艦大和に想いを乗せた男たち』の構成で民放連賞ラジオ教養最優秀受賞。09年民放連賞テレビ報道中央審査委員長、芸術祭ラジオ部門審査員などを歴任。東京新聞や放送専門各誌でメディア批評を連載中。武蔵大学社会学部兼任講師。